

Camp Session & Dialog Session

Camp SessionとDialog Sessionは、Plenary Lecturesよりも少人数で行われた、90分間と60分間のディスカッションセッション。講師とのより密接な距離での議論が行われた(Fig.6)。

私が一番興味を持ったのは、2010年、ボルツマン方程式とランダウ減衰に関する研究の成果によりフィールズ賞を受賞されたCédric Villani氏(Fig.7)による講演である。オーディエンスとのディスカッションの中で先生がおっしゃった、「複雑なことも突き詰めれば簡単になる。数学も、一見難しく感じられるが、実は非常にシンプルなのである。」という言葉や、「数学は今工業をはじめとするさまざまな業界で必要とされている。数学は世界を旅するのだ。」という言葉に、多くの参加者が拍手喝采を送った。



【Fig.6】Camp Sessionの様子



【Fig.7】Cédric Villani氏と

Excursion & Laboratory Visits

Excursionは、バンガロールから南西146kmの位置にある都市マイソールで行われた、インドの歴史を学びながら参加者同士の親睦を深めるためのイベント。マイソール宮殿(Fig.8)などの歴史的遺産を訪れた。マイソール宮殿は、1912年におよそ15年もの歳月をかけて建設された、マハラジャ(領主)の宮殿である。のちにこの王朝時代はイギリスによって終幕を迎えたが、この宮殿は非常に良い状態で保存されていた。日本代表派遣団は、まとめて宮殿を見学したが、理科好き・数学好きの集まりということもあり、宮殿の構造や壁などの材質などの話で盛り上がった。

Laboratory Visitsは、Indian Institute of Science(インド科学大学)の研究施設見学。Centre for Nano Science and Engineering(ナノ科学・工学センター)やCentre for Neuroscience(脳科学センター)、Laboratory for Hypersonic and Shock Wave Research(超音速・衝撃波研究所)などを見学した(Fig.9)。実際に研究で使用されている装置を見せていただいたり、研究内容に関するプレゼンテーションを聴講したりした。



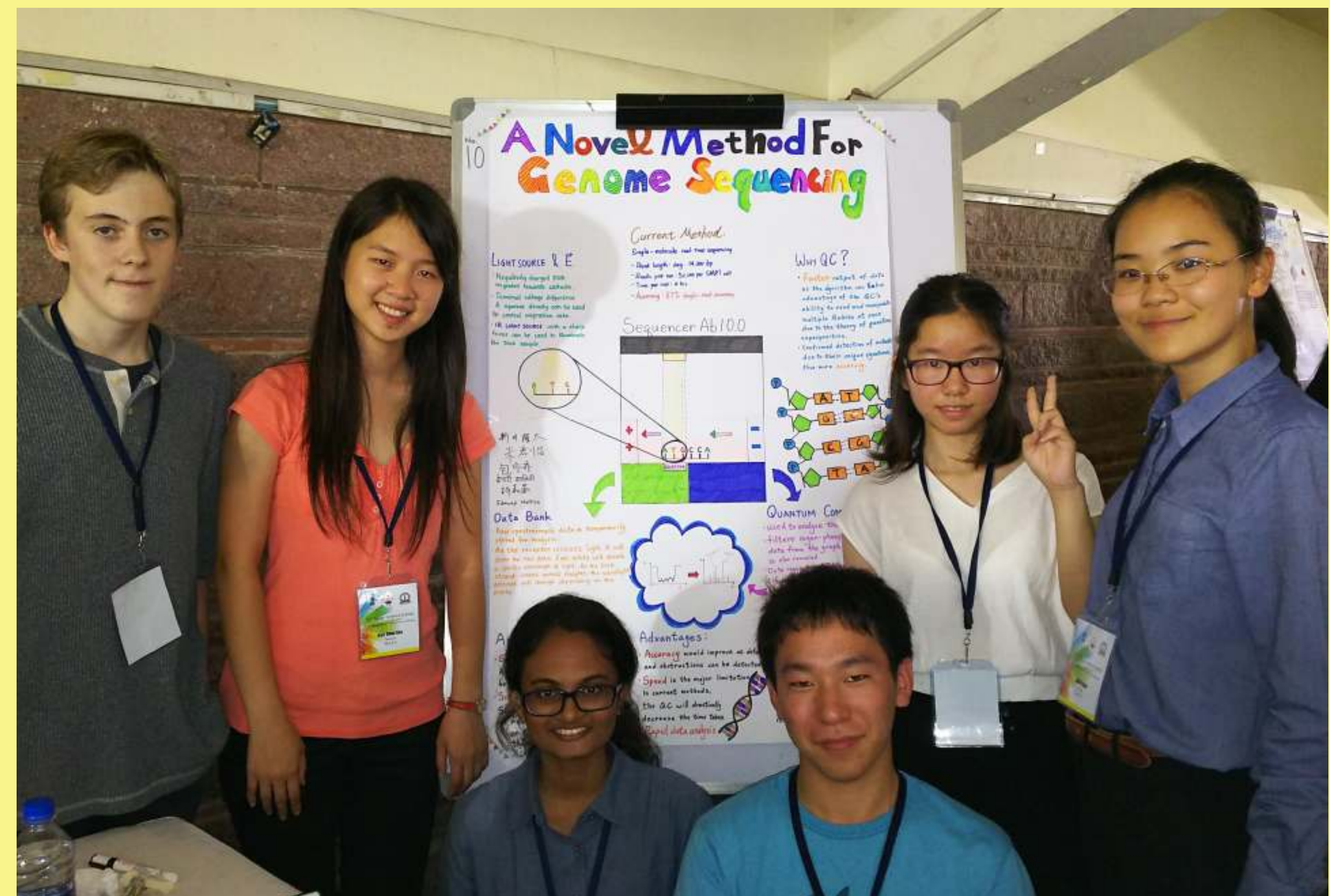
【Fig.8】マイソール宮殿



【Fig.9】衝撃波実験装置の見学の様子

Poster Presentation

Poster Presentationは、このアジアサイエンスキャンプのアクティビティの集大成である、参加者が37のグループに分かれて作成したポスターを発表するセッション。Genomic Medicine(ゲノム医療)、Bio Conservation(生命保護)、Stick-Slip Motion(スティックスリップ運動、摩擦面に生じる摩擦面の付着、滑りの繰り返しによって引き起こされる自励振動)、Quantum Computing(量子コンピュータの利用)、Chemical Bonding(化学結合)、Stereochemistry(立体化学)の各テーマから1つないし2つを選択して、各国・各地域混成で構成されたグループ内でメンバー同士が意見をぶつけ合いながら、1枚のポスターを作り上げた。私が所属した10班では、「A Novel Method For Genome Sequencing(ゲノムシーケンシングのためのノーベルの方法)」と題して、量子コンピュータを用いた画期的なDNAシーケンシング(塩基配列の決定)の方法を提案した。イングリッシュネイティブであるオーストラリア人とインド人の参加者のリードのもとに準備が進められたが、台湾や中国からの参加者が、積極的に自分の意見を発表していることに驚いた。確かな知識をベースに英語を自由自在に操って意見を発表する彼女らを見て、「そのトピックに対して自分はどうのように思考するか」という意見をはっきりと自分の中に持つことの大切さを学んだ。残念ながら、入賞をすることはできなかったが、内容を掘り下げて、しっかりと自分たちの意見を審査員の方々に伝えることができたので、とても充実したセッションになった。



【Fig.10】作成したポスターと10班のメンバー

3. おわりに～アジアサイエンスキャンプへの参加を通して私が学んだこと

アジアサイエンスキャンプへの参加を通して、英語を理解するだけでなく、英語を使って自分の意見を相手に伝えることの大切さを学んだ。日本での英語の授業では、先生の講義を聞いているだけで十分だった。しかし、このキャンプではそんな甘い姿勢は全く通用しなかった。自分から何かアクションを起こさなければ、会話を弾ませることや、友達の輪を広げていくことはできない。たとえ自分の英語が拙いものであったとしても、勇気を出して発言する必要がある。このキャンプに参加して、これらのことに改めて気づくことができた。また、このキャンプへの参加を通して、多くの国や地域に友達を作ることができた。FacebookやLineのアカウントも教え合ったので、これからも連絡を取り合っていきたい。



【Fig.11】会場のJ. N. Tata Auditorium